

# 「行ふ尼なりけり」考

—その文構造と意味—

北原保雄

## 一、問題提起

「源氏物語」の若紫の巻に、

日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々はかへし給ひて、惟光ばかり御供にて、のぞき給へば、ただ此の西面にしも、持仏すゑ奉りて、行ふ尼なりけり。簾垂すこしあげて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読み居たる尼君、ただびとと見えぬ。〔対校源氏物語新釈〕巻一の二七五ページ八行目以下。以下、引用文は本書による。

というところがある。この傍線の部分「ただ此の西面にしも、持仏すゑ奉りて、行ふ尼なりけり」を、どのように解釈したらいいか。この部分の文構造と意味について考えてみようというのが、この稿の目的である。

## 二、従来の諸説

まず、この部分について、これまででどんなことが言われているかを見てみよう。

北山谿太氏は、次のように述べている。

王朝文学叢書に口訳して、「持仏を握りて念仏してゐる尼が、あつた。」としてある。しかしながら、この文意は、「さきに女ありと見しは……行ふ尼なりけり」となるのであるから、「尼があつた」ではなくて「尼であつた」でなくてはならないと考へる。くわしくいえば、この「尼なりけり」は、これより三頁ばかり前に、

かしこに女こそありけれ。僧都は、よもさやうには据ゑ給はじを、いかなる人ならむと口々いふ。下りて覗くもあり。

をかしげなる女子ども、若き人、童ども見ゆるといふ。とあるのに、遙かに呼応するもので、源氏の供人どもが、僧坊に女のいるのを見て、「僧都は、よもさやうには据ゑ給はじを」と、大きな不審を抱いたのである。而してこの文には書いては

ないが、源氏も、また少なからず好奇心に駆られたのに相違ない。さればこそ、ひそかに「小柴垣のもとに立ち出で」たのである。決して何げなく立ち出でたのではない。然るに覗いて見ると、意外にもそれが、尼なることを知ったのである。「なりけり」の一語に、この予想外の発見によって、さきの疑念の一部が解けたような響が籠っているのを感じる。「尼ありけり」では、特別のあてもなしに覗いて見るようになって、源氏の心底にある、僧坊に居る婦人の正体に対する探究の心持が、一向に響かないのではなからうか。而して又、先行する長い文章の底を貫く文脈の流れが、全く顧みられないことになるのではあるまいか。「なりけり」の一語、一見小さいことのように見えるが、実に決してそうではない。一語能く、遙かなる前文に呼応する不思議な力を發揮しているのである。それにつけてもわたくしは、常に心をひそめて、ことばの靈妙さを見落さないようにしたいものだと思う。

〔若紫の巻とところどころ―『源氏』語義語法の研究―』『国文学』二の八）

「なりけり」という表現に注目しているのはいい。しかし、「なりけり」の一語に、この予想外の発見によって、さきの疑問の一部が解けたような響が籠っているのを感じる」とか、「一語能く、遙かなる前文に呼応する不思議な力を發揮しているのである」というような読み方は、主観に流れすぎてゐる。「尼があつた」ではなくて「尼であつた」という意味に解釈されるというのであれば、「何が」あるいは「誰が」「尼であつた」というのか、明確に示されなければならぬ。

次に、玉上琢弥氏の述べるところを見てみよう。

「尼さんがあつた」とか「尼がいた」などの訳文が見られ、「尼ありけり」とありたいと注されていたりする。また「なりけり」を生かして「おつとめをしているのは尼だつた」と訳するものもある。「尼なりけり」と受けられるものは、前文、僧坊を見下す条りの「…かしこをんなこそありけれ。僧都は、よもさやうにはすゑたまはじを、いかなる人ならむ…」なのである。つまり、女がいるとさわいでいた、どういふ人かと思つたその人は、尼だつた。若い女や童たちも尼に仕えるものであつた、と、この一文によって疑問が氷解するのである。「尼なりけり」をかく解するに於ては、その間に入った明石の噂話が長いため、両者の緊密性がなく、おだやかでないといふ向きもある。これについては、一、二の説明を加えることが出来よう。まず、当時の人は気が長かつたと思えるのが一つ、さらに物語音読論の立場から言えば、耳から響くものは、目で文字を追うより印象が軽いという事。また、この若紫の巻の冒頭にあつた絵は、「つづら折」の下の僧坊の有様、女、子供の姿などであり、相当長い文を背負う事の出来るものであつて、この絵を見ながら女房の声を耳にするなら、噂話の長さは気にならないと思われる。そして、この噂話のもつ意味は、明石の上の紹介なのではない。「かやうにても、なべてならず、もてひがみたること、このみたまふ御心なれば、御耳とどまらむやと見たてまつる」を引出し、そういう男君の性格を強く印象づけて少女への求婚という本巻の主題を可能ならしめることにあつた、と考えるのである。

〔どれが源氏物語の正しい解釈だろうか〕『解釈と鑑賞』二五七号)

基本的には、北山氏と同じ意見である。玉上氏は、「尼なりけり」は、僧坊を見下すくだりの「…かしこに女こそありけれ。…いかなる人ならむ…」を受けるのだという。しかし、氏の説明にある「当時の人は気が長かった」というのは、否定もできないが肯定もできないことである。また、氏のいう物語音読論を認めるにしても、どういう絵を見ながら、この部分の音読を聞いたかというのは、氏のいう通りかどうか問題である。そして、「耳から響くものは、目で文字を追うより印象が軽い」というのは、どういうことであろう。音読のための文は、構造がそれほどしっかりしていなくてもいいということであるならば、大問題である。

三ページ以上も前にある表現を受けて、いる、というのは、あくまでも、文脈上照応しているということで、「尼なりけり」は、「何が」あるいは「誰が」であるのか、ということについては、玉上氏も答えていないということになる。

松尾聰氏は、次のように述べている。

「なりけり」は「ありけり」とあるべきものかといわれるが、前に、「かしこに女こそありけれ。僧都はよもさやうに据ゑ給はじをいかなる人ならむ」とあったのに照応して、「女のありけると見えしは尼なりけり」となるのであろう。

〔全釈源氏物語 二二〕

これも、北山氏、玉上氏と共通する意見であるが、松尾氏の場合には、「女のありけると見えしは」というような語句を想定しているところが違う。しかし、三ページも前の表現と照応させて、主題成

分を補うのは、はたして妥当であるか。

### 三、類似の表現

こういう場合には、若紫の巻のこの部分だけについて考えていても、解決の糸口は見出せない。他の類似の表現をさがしてみることが有効な一つの方法である。

(1)寝殿の方に、人のけはひ聞くやうもやおぼして、やをら立ちいで給ふ。透垣のただすこし折れ残りたる隠れの方に立寄り給ふに、もとより立てる男ありけり。誰ならむ、心かけたる好色者ありけり、とおぼして、蔭につきて立ち隠れ給へば、頭中将なりけり。(末摘花 卷一—三二六<sup>⑩</sup>)

(2)宮は何心もなく大殿籠りにけるを、近く男のけはひのすれば、院のおはすとおぼしたるに、うちかしこまりたる気色見せて、床のしもに抱きおろし奉るに、物におそはるるかと、せめて見あげ給へれば、あらぬ人なりけり。(若菜下 卷四—六五<sup>⑪</sup>)

(3)「……」と聞え給へるを、涙ぐみて見給ふ程に、おとどの君渡り給へり。例ならず、お前近きらしいどもを、なぜ、怪しと御覽するに、院の御文なりけり。(横笛 卷四—一七二<sup>⑫</sup>)

(4)中門入り給ふ程に、同じ宿直姿なる人立てりけり。隠れなむと思ひけるを、引きとどめたれば、この常にたち煩ふ少将なりけり。(竹河 卷四—三九三<sup>⑬</sup>)

これらの傍線部分にも、主題あるいは主格の成分は示されていない。しかし、これら四つの例に共通する顕著な特徴は、すぐ近くにそれと分かるものが示されているということである。たとえば、(1)

では、「もとより立てる男」が「頭中将なりけり」というわけである。また、(4)では、「同じ宿直姿なる人」が「この常にたち煩ふ少将なりけり」というのである。(2)も(3)も、主題なり主格の成分は容易に補うことができる。つまり、これらの場合は、容易に補うことができるというので、省略されているのである。省略とは、そういうものである。日本語では、いわゆる主語はさほど重要でないなどという人がいるが、省略されるのは、それだけの理由のある場合である。

ひるがえって、この論で考察の対象としている、若紫の巻の「行ふ尼なりけり」を見なおしてみると、すぐ近くには、それらしき表現がない。したがって、「それは、行ふ尼なりけり」の「それは」に相当するような表現が省略されていると解釈して、すましてはいるわけにはいかない。

#### 四、「なり」「および」「なりけり」で終止する文の構造

ところで、ここに注目すべき解釈がある。それは、日本古典文学大系本に示された山岸徳平氏のものである。

すぐ目の前の、西側の部屋に、持仏をお据え申して、お勤めをしている人は、尼であった。「行ふ」は連体形で、その下に「人は」とか「者は」を略している。(日本古典文学大系『源氏物語一』一八三ページ頭注一八)

これならば、「尼なりけり」の主題成分は明白である。日本古典文学全集(阿部秋生・秋山虔・今井源衛三氏)も、「すぐその西面の部屋に、持仏をお据え申して、お勤めをしている、それは尼であった。」と通釈しており、ほぼ同じ意見のようである。こういう

解釈が、いつごろ、誰によって提唱されたものであるかということも、興味のある問題であるが、ここでは深く立ち入らない。ただ、前に引用した玉上氏の論の初めの部分に、すでに取り上げられているものであることだけを付言しておく。

それはともかく、この山岸氏のような解釈は許されるのであろうか。ここでも、やはり類似の表現を集めて、それによって考察することになる。

次に、主格あるいは主題の成分が活用語の連体形であるものを、(A)助詞が付いていないもの、(B)係助詞「は」の付いているもの、(C)係助詞「も」の付いているものに分けて列挙してみよう。

(A)助詞の付いていないもの  
(1)御几帳の帷子引きあげて見奉り給へば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥し給へるさま、よそ人だに、見奉らむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しうおぼす△、ことわりなり。

(癸) 卷一—三四四⑤)

(2)お前なる大人々々しき人など、いと悲しくて、さとうち泣きたる△、そぞろ寒きゆふべの気色なり。(癸) 卷一—三三六九③)

(3)掃り出でむ方もなき心地して、をがみ給ふに、ありし御面影さやかに見え給へる△、そぞろ寒きほどなり。(須磨) 卷二—二二〇⑨)

(4)俄に引きわかれて、恋しう思ひ聞え給へる△、ことわりなり。

(須磨) 卷二—二一八⑪)

(5)「げにうち思ふままに聞えてけるかな」とおぼして、みづからもうち笑み給へる△、いとをかしき色合つらつきなり。(野分) 卷三—一一四⑭)

(6)今は、しかかけ離れてもいで給ふらむに、さて心強く物し給ふ△、いとおもなう人笑へなる事なり。(卷三一―一九三⑨)

(7)「:」と諫め申し給ふ△、ことわりなり。(真木柱 卷三一―二〇一③)

(8)かくおぼしたる△、ことわりなり。(若菜上 卷三一―三六六⑦)

(9)ただ人のすくよかになほなほしきをのみ、今の世の人のかしくする△、品なきわざなり。(若菜下 卷四一―八⑥)

(10)よきやうといひながら、あまり心もとなくおくれたる△、頼もしげなきわざなり。(若菜下 卷四一―九六⑤)

(11)すべてかかることの心苦しきを見過ぐまで、あやなき、人の恨み負ふ△、かへりてはかるがるしきわざなりけり。(藤袴 卷三一―六四⑥)

(B)係助詞「は」の付いているもの

(12)限りとて別るる道の悲しきにかましきは命なりけり(桐壺 卷一一―六⑧)

(13)ひたすら世になくなりてのちに恨み残すは、世の常の事なり。(葵 卷一一―三四二⑦)

(14)いつかたともなくゆくへなき心地し給ひて、只目のまへに見やらるるは、淡路島なりけり。(明石 卷二一―七二⑦)

(15)天変しきりにさとし、世の中しつかならぬは、このけなり。(薄雲 卷二一―二五四⑩)

(16)富士の峰よりも、けにくゆりみち出でたるは、本意なきわざなり。(鈴虫 卷四一―九五④)

(17)その頃按察の大納言と聞ゆるは、故致仕のおとどの次郎なり。(紅梅 卷四一―三六七①)

(C)係助詞「も」の付いているもの

(18)「人たがへにこそ侍るめれ」といふも、息の下なり。(常木 卷一一―七八⑦)

(19)程なき柏、人よりは黒く染めて、黒き汗衫、萱草色の袴など着たるも、をかしき姿なり。(葵 卷一一―三六三⑩)

(20)かかる所をわざとつくるふも、あいなきわざなり。(松風 卷二一―二八①)

(21)田舎びたる人をば、かやうの所には、よからぬなまものどもの、あなづらはしうするも、忝きことなり。(玉壺 卷二一―三七九①)

(22)さかしらに迎へるて来て、人斯う誇るとて、返しおくらむも、いとかるがるしく、物ぐるほしきやうなり。(常夏 卷三一―八五⑫)

五⑫)

(23)鹿はただ離のもとにたたずみつつ、山田の引板にも驚かず、色濃き稲どものなかにまじりて打鳴くも、愁へがほなり。(夕霧 卷四一―二五八⑤)

山岸氏のように解釈するのは、(A)のような類型とみなしてのことである。ただ、(A)には、「なり」が圧倒的に多く、「なりけり」は、

(1)の例文のようにないことはないが、きわめて僅少である。しかし、「けり」はいわゆる気づきの「けり」であるから、この類型に用いられてはいけないというものではないだろう。

(B)や(C)のように係助詞「は」や「も」が付いていれば、題述関係という文の構造がはっきりする。(A)の中にも、河内本では「は」や「も」の付くものがあり、(A)の中の(9)(10)(11)などは、述語が「〜わざなり」という形であるという点で、(B)の(10)、(C)の(20)などと変わると

ころがない。

それでは、(A)と(B)との間には、何の違いもないのであろうか。

前掲の例文をつぶさに観察すると、(A)と(B)の間には、重大な違いがあるように思われる。

(B)の、たとえば(2)の「いかまほしきは命なりけり」の「いかまほしき」と「命」には、「命がいかまほし」という格関係が認められる。また、(4)の「只目のまへに見やらるるは、淡路島なりけり」の「只目のまへに見やらるる」と「淡路島」にも、「淡路島が、只目のまへに見やらる」という格関係が認められる。(5)の「天変しきりにさとし、世の中しづかならぬは、このけなり」の「天変しきりにさとし、世の中しづかならぬ」と「このけ」の間にも、「このけにて、天変しきりにさとし、世の中しづかならず」という格関係が認められる。(6)の「その頃按察の大納言と聞ゆるは、故致仕のおとどの次郎なり」の「その頃按察の大納言と聞ゆる」と「故致仕のおとどの次郎」の間にも、「故致仕のおとどの次郎が、その頃按察の大納言と聞ゆる」という格関係が認められる。

つまり、(B)の(2)(4)(5)(6)などは、変形文法でいう一種の分裂文になっている。いうまでもなく、(B)のすべての例文が分裂文になっているのではない。(1)(4)などは(A)と変らない文構造である。

それでは、その(A)は、どういう文構造の表現であらうか。(1)の「まして惜しう悲しうおぼす、ことわりなり」は、「(源氏が)まして惜しう悲しうおぼす」ということについて、表現主体が、それは「ことわりなり」と、評釈している表現で、「まして惜しう悲しうおぼす」と「ことわり」の間には、格関係は認められない。(2)は、「お前なる大人々々しき人などが、いと悲しくて、さとうち泣いた」

そのさまについて、「そぞろ寒きゆふべの気色なり」と評釈している表現で、「さとうち泣きたる」と「そぞろ寒きゆふべの気色」との間には、格関係が認められない。

(5)の「みづからもうち笑み給へる、いとをかしき色合つらつきなり」などには、「いとをかしき色合つらつきにて、みづからもうち笑み給へり」という格関係が認められそうであるが、これはやはり無理な解釈で、「みづからもうち笑み給へる」、「そのさまが」「いとをかしき色合つらつきなり」というのであろう。

以上に述べたことをまとめると、次のようになる。(B) (係助詞「は」の付いていないもの)には分裂文の構造のものもあるが、(A) 助詞の付いていないもの( )には分裂文の構造のものはなく、ある事象やある状態について表現主体が評釈や注釈を示す表現しかない。つまり、(B)には(A)のような構造のものもあるが、(A)の方には(B)のような分裂文の構造のものはないということである。

こういう観点から、(C) (係助詞「も」の付いているもの)について見てみると、(C)にも分裂文の構造になっている例は認められず、(A)と同じく、ある事象やある状態についての表現主体の評釈や注釈を表現したもののだけのものである。

(A)と(B)の間には、どうしてこのような違いが出てくるのであろうか。(B)の分裂文(4)を例にとって考えてみよう。

(a) 目のまへに見やらるるは、淡路島なりけり。  
は、

(b) 淡路島(が) 目のまへに見やらるる。

を、もとの文としてできているものである。一方、この(b)の文をもとにして、

(c)目のまへに見やらるる淡路島なりけり。

という連体修飾構造の文もできる。この(c)の文は、

(d)目のまへに見やらるる、淡路島なりけり。

のように、「見やらるる」の次に、読点を打ち、少々ポーズをおいたところで、やはり連体修飾構造を保ちうる。したがって、(d)の文は、

(d<sub>1</sub>)目のまへに見やらるる、淡路島なりけり。

連体修飾

被修飾

(d<sub>2</sub>)目のまへに見やらるる、淡路島なりけり。

の二様に解釈されうる。この(d<sub>2</sub>)の解釈の可能性を排除するためには、「見やらるる」の次に助詞を入れればいい。その助詞は、「は」に限られるというわけではないが、(B)にしか分裂文のない理由の一つは、この点に求められよう。

(A)の(1)の「まして惜しう悲しうおぼす、ことわりなり。」に例をとると、この文は、

(e) (源氏が)まして惜しう悲しうおぼす、述(それについての)評釈ことわりなり。

という構造であり、その主述関係は、助詞がなくても、誤って理解されることはない。文の構造、表現されている内容の両面から、助詞は省略しうるのである。もちろん、助詞「は」や「も」が付いてもいい。それが、(B)の(2)や(C)の諸例である。

ちなみに、主格あるいは主題の成分が活用語の連体形に形式名詞の付いたものについて見てみよう。

(D)助詞の付いていないもの

(24)ふたぎもてゆくままに、難き韻の文字どもいと多くて、覚えある博士どもなどの、惑ふところを、時々うち直ふまま、

いとよなき御さえの程なり。(賢木 卷一―四三六③)

(25)尼君、「――歌――」とて泣き給ふさま、いとことわりなり。

(松風 卷二―二二一⑥)

(26)さやうなる事の世に漏り出でむこと、いと憂き事なり。(若

菜上 卷三―二八九②)

(27)宮の泣きまどひ給ふこと、いとことわりなりかし。(夕霧

卷四―二四九①)

(B)係助詞「は」の付いているもの

(28)行平の中納言の関吹き越ゆるといひけむ浦浪、夜々はげにいと近く聞えて、又なくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。(須磨 卷二―二六六①)

(29)今あらため書かむことは、本意なきことなり。(絵合 卷二―

一九六③)

(30)とあるもかかると、きは離るる事は、難きものなりけり。(若

菜上 卷三―三二四⑩)

(F)係助詞「も」の付いているもの

(31)「:」とて、御髪を搔きやりつつ、いとほしとおぼしたるさまも、絵にかかまほしき御あはひなり。(権 卷二―二八六④)

詳しい説明は省略に従うが、(D)(E)(F)の関係は、前に見た(A)(B)(C)の関係とほぼ同様である。

## 五、結論

さて、結論である。「ただ此の西面にしも、持仏すゑ奉りて、行ふ尼なりけり」は、やはり主述のととのった構文と解釈しなければ

ば、落ち着かない。したがって、

主

述

ただ此の西面にしも持仏す奉りて行ふ<sup>↓</sup> 尼なりけり<sup>↑</sup>  
という文構造であると解釈したいが、その場合、

すぐその西面の部屋に持仏をお据え申してお勤めをしているのは、尼であった。

と現代語訳をしたのでは、「尼が行ふ」という格関係の認められる分裂文になってしまう。係助詞の付いていない(A)の文型であることを重視すれば、

すぐその西面の部屋に、一人の人が持仏をお据え申してお勤めをしているのは、(俗の姿ではなく)尼姿であった。

と解釈しなければならぬことになる。つまり、西面の部屋で、ある人がお勤めをしている、それについて、尼の形に見えた、尼であったと、判定する表現であると理解されることになる。

山岸氏の解釈では、「お勤めをしている人は」となっているが、

「人がお勤めをしているのは」となるべきだし、「尼であった」は「尼形であった(尼の姿に見えた)」とでも現代語訳すべきで、二つの点で、この稿の結論とは異なる。日本古典文学全集の解釈も、はっきりとはいえないが、やはり、山岸氏の解釈に近いもののように読み取れる。

(筑波大学文芸・言語学系教授)